

## 第3回

# Thiel 法固定遺体による麻酔ワークショップ

## The 3rd Workshop for Anesthesia on Thiel's Embalmed Cadavers

主催 札幌医科大学医学部麻酔科学教室

2011年8月6(土), 7(日)  
札幌医科大学北1講義室, 解剖実習室

〒060-8543  
札幌市中央区南1条西16丁目  
札幌医科大学医学部  
Tel : 011-611-2111

本セミナーは札幌医科大学倫理委員会の承認と解剖学教室の協力を得て行なわれています。

総括責任者	札幌医科大学医学部麻酔科学教室	教授	山蔭道明
実施責任者	札幌医科大学医学部麻酔科学教室	准教授	山内正憲
管理者	札幌医科大学医学部第二解剖学教室	教授	藤宮峰子

参加者	講師 8名	札幌医科大学医学部麻酔科	教授	山蔭道明
		同	准教授	山内正憲
		同	助教	枝長充隆
		他数名		

なお、講師の旅費、謝金、日当は一切ありません。

受講料 30,000 円

内訳：テキスト印刷 1,000 円，超音波装置レンタル料 10,000 円)  
消耗品 18,000 円 (ガウン，手袋，針，薬液，超音波カバー，  
遺体カバー袋)，昼食 1,000 円

遺体 Thiel 法固定遺体 5 体

協力 ソノサイトジャパン (株)，(株) インターメドジャパン

## スケジュール

8月6日(土)

10:00	オリエンテーション
10:10	講義 神経ブロック(上肢, 下肢, 体幹), 気管切開, 心臓
11:30	昼食
12:00	着替え, 超音波機器セットアップ
12:30	Hands on セミナー(9ブース各20分)
16:00	解剖
17:00	清掃
17:30	黙祷

8月7日(日)

研究目的の遺体使用

## 実習に寄せて

近年, 医療技術の高度化に伴い, 様々な手技が開発されている. それらの手技は的確に行われれば安全で質の高い医療が可能であるが, その習得に時間がかかるのが現状である. 例えば, 超音波ガイド下に神経ブロックを行なうことで, 神経刺激のみで行なう従来の方法よりも安全かつ確実となった. しかし, 超音波ガイド下神経ブロックを行なうためには超音波画像の描出と穿刺針の刺入トレーニングが必要である. 本セミナーでは超音波画像の描出と実際の穿刺を新鮮凍結ご遺体で行なうことで, 実際の臨床と同様の感覚を養うことを目的としている. さらに, 今回初めて使用する Thiel 法による固定遺体は生体と極めて近い物理的性質があるため, 神経ブロック後に肉眼解剖を行なうことで神経周囲の解剖の理解, 薬液の広がりを観察, および基礎的研究も可能である. 本ワークショップでは神経ブロック以外に実際の臨床では機会が少ない, または十分にトレーニングを行えない気管切開, 経食道心臓超音波検査など麻酔に必要な様々な手技についても実習を行う.

なお, 献体された方の意思と尊厳を忘れることなく, 感謝と適切な態度で遺体に接することで, 生命の尊厳への理解も深めて下さい.

### ◆注意点◆

遺体は既知のウイルスおよび細菌への感染の危険がなく、生体と極めて近い保存法である Thiel 法固定を行っていますが、セミナー中は手術用ディスポーザブルガウン、手袋、帽子、マスク、長靴を着用して下さい。使用機器などを介した体液の汚染等には十分配慮して下さい。

### ◆遺体、機器◆

- ・超音波装置 ソノサイト社 M-Turbo<sup>®</sup>, MicroMaxx<sup>®</sup>, S-Nerve<sup>®</sup> 計 10 台
- ・穿刺針 Pajunk 超音波ガイド下神経ブロック針 22G-50mm, 70mm
- ・遺体：5 体 ストップウォッチ：4 個 各班に超音波装置 1 台

### ◆グループ◆

3-4 名×5 グループ

### ◆方法◆

各遺体でインストラクターが 5 分間で説明・デモンストレーション。続いて一人 5 分間で描出と穿刺を行い、適宜少量の生食投与も行う。気管切開は最後に各班の代表者が行う。ワークショップ最後に色素を投与した 1 体を解剖して理解を深める。

- ・ブース（最大で以下の予定です。時間の都合でもっと減らす予定です）

上肢Ⅰ（20分）：斜角筋間 C5 鎖骨上

上肢Ⅱ（20分）：鎖骨下 腋窩

下肢（20分）：大腿 閉鎖 坐骨（膝窩）

体幹（20分）：腹横筋筋膜面 腹直筋筋膜面

脊椎（20分）：腰部硬膜外 腰神経叢 仙骨神経叢

IVH（20分）：内頸 V 交差法 鎖骨上平行法

末梢動静脈穿刺（20分）：橈骨 A, 上腕 V

TEE（20分）

気管切開（20分）

- ・解剖 1 体のみ（60分）：可能な限り色素の広がりを肉眼解剖で確認する。